

違いが描く私の輪郭

高崎市立並榎中学校

三年 只木 初香

「個性は人と比べるものではない」とよく言われる。しかし、本当にそうだろうか。私は、人と比べる過程の中にこそ、自分の個性に気づくきっかけがあると考えている。

私はこれまで、人と比べるのはよくないことだと思っていた。テストの点数や運動能力など、あらゆる場面で優劣の差を意識してしまい、落ち込んだり、自信を無くしたりしたからだ。私はどちらかといえば作業が遅く、要領もいい方ではない。そのため、私は周囲より劣っているのではないかと感じるが多かった。

以前、グループで課題に取り組んだ時のことである。周囲の人は次々と意見を出し、素早く作業を進めていたが、私は些細な言葉遣いや全体の流れが気になり、細かい部分にも意識を向けながら進めていた。次第に、

自分だけが周囲についていけないように感じ、作業の遅さに焦りを覚えるようになった。実際、私は「もっと効率よくできればいいのに」と何度も自分を責めていた。しかし、完成したものを見た時、友達から「説明がわかりやすい」「細かい部分までよく考えられている」と言われた。その言葉を聞き、私は初めて、自分が時間をかけていたのは、ただ作業が遅いからではなく、「より伝わる形にしたい」という思いがあつたからなのだと気づいた。それ以来、人と比べることに対する見方が少し変わった。当時の私は、自分に足りない部分を実感するだけのものだと思っていた。しかし今では、自分を否定するためではなく、自分を知るための手段なのだと考えるようになった。比べることで見えてくるのは単なる優劣ではなく、一人ひとりの違いである。その違いこそが個性であり、自分自身の根幹になっているのだと思う。

もし周りに誰もいなければ、自分の個性を比べたり、活かしたりする場面も少なくなってしまう。異なる意見や考えを持った人たちは、自分の個性を映し出してくれる鏡のような存在だ。その人たちの中にいるから

こそ、自分の視点が他者との違いとして生かされ、自分という存在をより鮮明にしていく。だからこそ、私は人との関わりを大切にしたい。そして、自分の個性だけでなく、周りの人の個性にも目を向けたい。「自分とは違うけれど、それもいい」と受け入れることで、人との関係はより豊かになる。そして、自分自身も安心して個性を発揮できるようになるはずだ。

また、人と比べることは、自分を成長させるきっかけにもなる。私は生徒会長として人前で話すことが多いが、発表が上手な友達の話し方を見て、自分も原稿を何度も読み直したり、声の出し方を工夫したりするようにになった。その結果、以前よりも自信を持って人前で話せるようになった。周りの人の良いところを知ること、で、「自分もこうなりたい」と思い、努力する意欲が生まれる。さらに、自分には足りない部分や課題にも気づくことができるため、なりたい自分の姿を、はつきりとイメージできるようになる。しかし、比べて落ち込むだけでは意味がない。大切なのは、その違いをどう受け止めるかである。自分より優れている人を見て「自分はだめだ」と思うのではなく、「どうすれ

ば近づけるだろう」と考えて、前に進む力に変えることができれば、人と比べることは大きな意味を持つ。私は、比べて感じた悔しさや焦りをそのままにせず、自分を見つめ直すきっかけにしたい。そして、その感情を原動力に変え、努力を積み重ねることで、確かな成長へとつなげていきたい。

人と比べることは、時に自分を苦しめる。だからこそ、その結果にとらわれすぎないことが大切だ。優劣だけに目を向けるのではなく、その背後にある違いに目を向け、それを自分らしさとして受け入れる。そうすることで、比べることは単なる競争ではなく、自分を理解するきっかけとなる。

私はこれからも、人との違いを前向きに捉え、その中から自分の良さや課題を見つけていきたい。そして、比べることを恐れるのではなく、自分の個性をより深く知り、磨いていくための機会として生かしていきたい。人と比べたときに見える違いこそが、私の輪郭である。その線を、これからは自分の手で、少しずつ濃く描いていきたい。